

V. 東海調査で「問われた」もの —瑞浪地域調査概要報告をかねて

大串 潤児

はじめに

2022年5月12～14日に行われた東海地方調査は、名古屋を拠点にして“たこ足”のように研究班員が各地を訪問・調査するものとなった。いずれも個別に情報が集まってきたものではあったが、総括してみるとこの東海調査の成果からはいくつかの特徴的な論点を引き出すことができるように思われる。

第一に、2021年度までの地域調査をまとめた『国策紙芝居一地域への視点・植民地の経験』御茶の水書房、2022年でも指摘したことだが、あらためて仏教寺院・神社など宗教施設と紙芝居運動の関わりのおおきさである。それは、例えば滋賀県愛荘町の篤実な僧侶である木津龍尊、あるいは東北調査で出会った藤田溪山という個性的な僧侶の事例もあるけれど、とりわけ真宗大谷派名古屋別院教化センター調査で「痛感」されたように仏教界・宗派によるまるごと組織ぐるみでの紙芝居運動という問題のもつ意義のおおきさである。紙芝居と仏教（宗教）—広く「戦争と仏教（宗教）」という問題については、私たちの研究班でもまとまった検討を行っていないテーマである。本 News-Letter 別冊ではほとんどの調査に参加した原田広氏に「戦争と仏教」についての試論的問題提起をお願いした（Ⅶ. 仏教と紙芝居）。

第二に、地域独自の紙芝居運動組織の具体像と、そこで独自に作成された紙芝居の発掘・調査という問題である。情報へのアクセスの便宜から、私たちはどうしても日本教育紙芝居協会および協会地方支部に焦点をあてて調査の手がかりとしている。東北調査でもそうだったが、2022年初夏の調査は、こうした日本教育紙芝居協会中心の調査からさらに地域社会そのものの状況に視野を深め、地域独自の組織や地域独自の創作紙芝居を意識的に調査したことが特徴であった。愛知県内政部振興課が作成した『渡邊華山先生』（ただし出版年は不明）や、県内各郡に支部があったと思われる岐阜画劇報国会と『久遠の輝』などがこうした関心から新たに判明した組織・作品である*1。



図1 『岐阜県常会時報』第40号、1943年5月
岐阜画劇報国会結成を伝える記事。詳細は松本和樹
論考。

第三に、紙芝居を受容した社会層と地域の娯楽状況、両者を総合的にとらえるためにはどのような方法が求められるか、という論点である。各務原の場合、すでに指摘されているように、軍隊と紙芝居・軍都と紙芝居（運動）の関係は今後の検討課題にまつところがおおきい*2。瑞浪市調査はこうした問題を考えるためのまた別の一つの手がかりを示唆してくれているように思われた。

一. 瑞浪へ

きっかけは、研究班メンバー・新垣夢乃氏による瑞浪市民図書館ホームページの蔵書検索からである。蔵書検索を行ったところ、1941年～1944年にかけて制作された紙芝居26点がヒットしたのである。そこから、瑞浪市民図書館と連絡を取り、調査の調整を行い、2022年5月14日に紙芝居の閲覧、複写をさせていただくことができた。

中央線は名古屋を出発し、春日井・多治見・土岐を経て美濃の国にはいると目立って山がちの場所を走るようになる。とはいえ、信州・木曽のように山が木曽川筋まで迫ってくるような場所でもなく、何となく「開けた」



感じのする場所だ。土岐・瑞浪は、古来、窯業が盛んな地域である。このような場所になぜ紙芝居がまとまって残されたのか、当面の関心はそこに注がれる。

調査・複写作業に先だって、早川瑞浪市民図書館長から所蔵紙芝居の由来をうかがった。早川さんの話によれば、紙芝居は瑞浪にあった旧地方事務所建物解体の際に廃棄処分になる予定であったものが図書館に移管されたもの、時期ははっきりしないがおおむね 1990 年代にはいつてからのことである、ということであった。たしかに所蔵紙芝居作品本体には「岐阜県地方事務所」の押印があるものがあった。この紙芝居群については、もともと「ひとまとまり」のものであったかどうか一つまみコレクション・史料群としての特徴を考えるかどうか、については議論の余地があるが、もとの所蔵場所から考えても、戦時行政の最末端機構を担い町村行政を指導・監督した地方事務所が所蔵・管理し、各種団体などに貸与していたものであろうことが想定できる。現在残されているものの特徴としては、1) 作品発行年代は 1943～1944 年のものに集中し、かつ直截的に戦意昂揚を意図した作品が多いこと、2) 軍人援護会関係作品も含まれるが、むしろ注目すべきは国民徴用援護会（大日本画劇株式会社）作品が目立つこと、である。

2020 年 11 月に実施された栃木県小山市立博物館所蔵紙芝居調査では、農村部である下都賀郡・小山地域の特徴に対応してか、所蔵先には農山漁村文化協会製作作品が多く、農作業や病虫害の対策を簡単に紹介する作品がまとまって存在していた。いまだに検討課題を残すとはいえ、地域にのこる紙芝居史料群が、当該地域の戦時社会の様相に対応していることは十分想定しえるように思われる。逆にいえば、1,000 タイトルを越えるといわれる戦時紙芝居も、いわば総花的に一つの地域社会が所蔵・管理し、また教師などの実演者個人があらゆるジャンルのものを扱うのではなく、地域社会の現実や、実演者個人が関係している社会のありようによってバラエティをもつ。そうしたかたちで「まとまり」をもって存在していると考えられるのである。

瑞浪での「新規発掘」となった『浄峠』や『戦ひの

楯』『心は一つ』などは国民徴用援護会・大日本画劇株式会社作品の代表的なものである。大日本画劇株式会社は、大日本産業報国会とつながりをもち「産報紙芝居」の発行元として知られている。なぜ徴用工についての援護活動を行う団体に関連する紙芝居が多く集まっているのか、なぜ戦意高揚に関連する作品が多いのか（逆に子ども向け、農村向けのものが少ないのか）。こうした問題は、各種団体や町村行政の要望というかたちで表現される地域社会の様相に、常に向かい合うことが求められた地方事務所が、戦時期瑞浪の具体的なすがた―地域社会の労働や娯楽、生活をどのように考えていたのか、という問題を媒介にして見えてくることになる。その前提として、やはり戦時下瑞浪の地域的特徴を見なくてはならない。

瑞浪周辺地域は陶器＝焼き物産業が盛んであった。戦時期にあつて窯業は機械・鉄鋼などの軍需産業とは異なり、比較的民需向けの産業であった。現在は瑞浪市になっている陶町（すえちょう）『昭和十九年 事業報告』は次のように記している。「町ノ主要産業タル窯業ハ、戦局ノ進展ニ伴ヒ燃料、労力等益々逼迫ノ度ヲ加工、前年ニ引続き不振ヲ極メ、為ニ本年上半期ニ於ケル町財界ハ、全面的ニ不況ヲ免レザル状態ナリ」*³。戦争は窯業に大きな打撃を与えていることがわかる。同時に、鉄資源不足のための代用品として陶器に注目があたるのも戦争末期のこととなる。そうした事情もあつたのだろうか、陶町「事業報告」は続けて次のように記している。「然ルニ下半期ニ至リ之等業者ノ大部分ハ、平和産業ノ旧殻ヲ脱シ、夫々軍需品生産ヲ主体トシテ工場切替ヲ断行、時局産業ニ転向シ早クモ中ニハ軍管理工場トシテ指定サレ、或ハ軍協力工場、有名軍需工場ノ協力工場トシテ発足スルモノ等有リ」。つまり陶町では地域産業において窯業からの「転換」（あるいは軍需向けの陶器生産）がなされ、さらに「一方航空機部品製造ヲ目的トスル、拳町一致軍需工場ノ新設ヲ見ル等、漸ク軍工業地トシテ面目ヲ一新、不況にあえいでいた町財界も「稍々活潑ノ活況ヲ呈シタリ」と言われる状況となっていく。これにともない人口も「転業転出者ノ減少、疎開者・転入等

[5] 岐阜県瑞浪市立図書館

	タイトル	作者	出版社	出版年	
1	手ニ手ヲツナゴ	真木三郎脚本	紙芝居刊行会	1944 年 9 月	新規発掘
2	浄峠	羽田長治著・峯田弘画	大日本画劇	1944 年 9 月	所蔵判明

[6] 静岡県富士市立図書館「富士文庫」

	タイトル	作者	出版社	出版年	
1	男の叫び	小貫武雄原作・戸塚孝画	大日本産業報国会	1942 年 7 月	新規発掘
2	人情風呂	奥嶺基三郎原作	大日本画劇	1941 年 10 月	所蔵判明
3	世紀の槌音	大倉芳郎原作・北島英作脚色・白倉靖司画	大日本画劇	1941 年 11 月	所蔵判明

ニ依り、前年ニ比シ相当増加シ町内景況ハ全般的ニ良好であったという*3。「微用工」としての労働者がどれほどこの地域に流入しているかは不明だが、ここからは軍需工業地帯化により転業・転出に抑制がかかり、転入者が増加するなど労働力を吸引する地域になっていったことがうかがえよう。

こうしてこの地域には軍需産業に従事する労働者が増加していったと思われるが、彼らの生活を支える基盤、特に娯楽の状況はどうなっていたのだろうか。

瑞浪などをふくむ東濃地域は近世以来農村歌舞伎（「地芝居」「地歌舞伎」）が盛んな地域だった。都市部・町場の劇場（映画館）の展開など詳しく調べなくてはならないが、こうした伝統的な娯楽が広範に展開していた地域であることは重要な議論の手がかりになる。松本和樹論考で紹介された各務原地域も農村歌舞伎が盛んな文化圏にあったが、例えば各務原の村国座といった著名な劇場も戦時期にはいったん興行が行われなくなっていたという。状況は瑞浪でも同様であるようで、こうした農村歌舞伎・地芝居の衰退＝娯楽供給の衰退という事態と、紙芝居文化の「娯楽」としての側面がどのように相関するか、という問題が重要な検討課題になってくるのである*4。



図2 瑞浪市民図書館

瑞浪市民図書館には27点の作品が所蔵されていた。ご厚意により複写・調査できた紙芝居のうち「新規発掘」「所蔵判明」は前頁の通りであった。

なお、17日には静岡県富士市立図書館「富士文庫」が所蔵する12点の戦時紙芝居作品の撮影を行った。「新規発掘」「所蔵判明」作品も前頁の通りである。大日本産業報国会およびそれと関連する紙芝居作品を多く作っていた大日本画劇株式会社作品が目立つ。史料としての「まとまり」の意義については詳細不明である。

- *1 前述した秋田比内町の秋田画劇顕彰会と『戊辰の烈婦 山城みよ女』などもそれにあたる。なお岐阜県の紙芝居運動に関連して、各務原市内鶴沼地域の翼賛会文化班による紙芝居活動の記録が『各務原市史 史料編 近代・現代』各務原市教育委員会、1986年、470頁に収録されている。
- *2 福岡県大刀洗についての安田常雄氏の報告（拙編『国策紙芝居一地域への視点・植民地の経験』御茶の水書房、2022年、37頁）および拙稿「軍隊と紙芝居」吉田裕編『戦争と軍隊の政治社会史』大月書店、2021年参照。
- *3 以上「昭和十九年 陶町事業報告」は瑞浪市々史編纂委員会編『瑞浪市の歴史 略史市史編』瑞浪市、1971年、365～366頁。同史料のうち「町の景況」の部分による。
- *4 また戦時下の労働現場の具体的ありかた（長時間労働などの労働条件の悪化）が、「芸術的・文化的」な作品鑑賞の余裕を奪い、かえって「強烈的な刺激」を求めるかたちで激越な「戦意高揚もの」を求めたとも考えられる。工場労働のみならず、炭鉱などでの紙芝居利用は比較的良好に知られているが、戦時労働史と紙芝居文化の関係はまだつめた議論をしていない。



図3・図4 各務原空襲資料室

各務原市歴史民俗資料館・木曾川文化史料館には常設展示として「各務原空襲資料室」が置かれている。同室に展示されている重爆撃機のプロペラは、その大きさに軍隊（飛行場）の街・各務原の経験を雄弁に物語っているようだ。紙芝居作品にも航空機献納を扱ったものがあった（『稲葉号の献納』稲葉郡画劇報国会、手書き作品）。